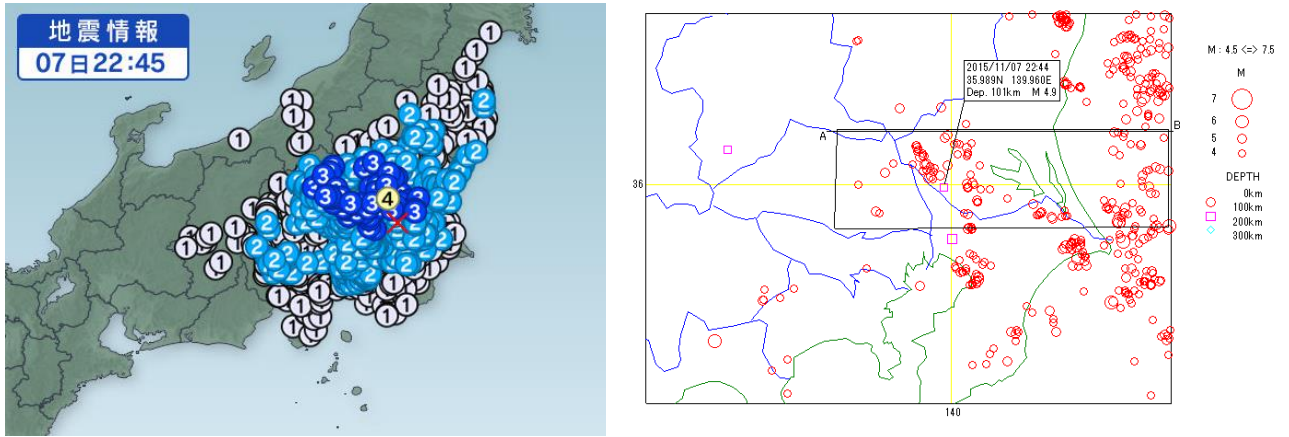


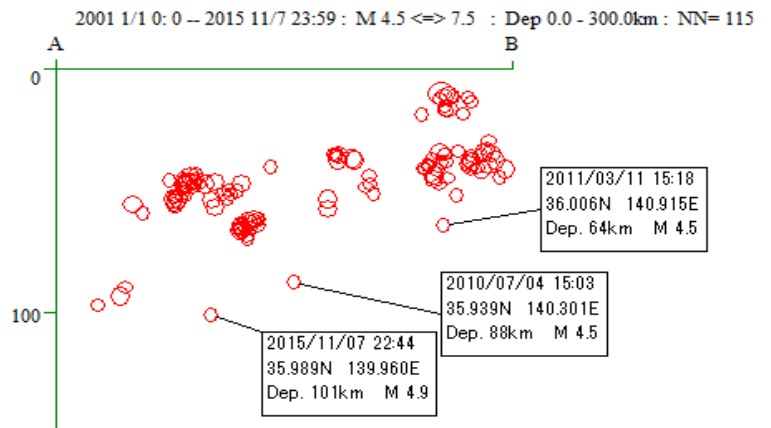
11月7日に首都圏を（少し）揺らした地震と中部・近畿地方の地下天気図

7日の深夜に首都圏で中規模の地震が発生しました。関東地方は最近かなり地震活動が落ち着いていましたが、久しぶりの震度4でした。この地震は規模としてはマグニチュード4.9と、大騒ぎする必要はないのですが、この地域で通常地震が発生している場所より少し深い場所で発生したちょっと奇妙な地震でした。右側の図の四角の中の断面図が右下の図となります。



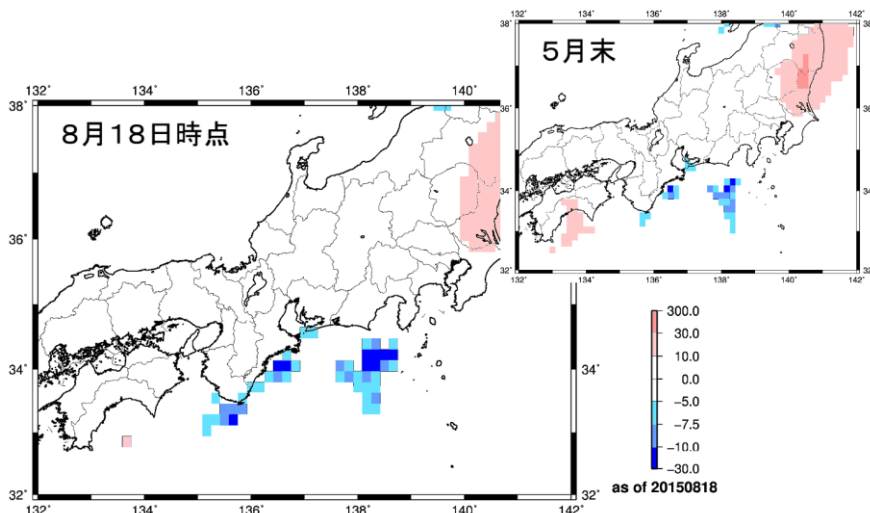
どう奇妙かといいますと、右側の図は2001年以降に図中の地域で発生したM4.5以上のすべての地震を示してあります。場所はよく地震が発生する場所なのですが、普段発生している場所より少し深い場所で発生していたのです。

この深さの並びでは、過去15年間では、7日の地震以外では、311の余震と2010年7月にM4.5の地震が発生しているだけです。今後同様な地域(深さ)で地震が連続して発生するかを注視する必要があります。地震学的には、大きな浅い地震の前にはこのような少し深い所で地震が続く可能性が指摘されています。

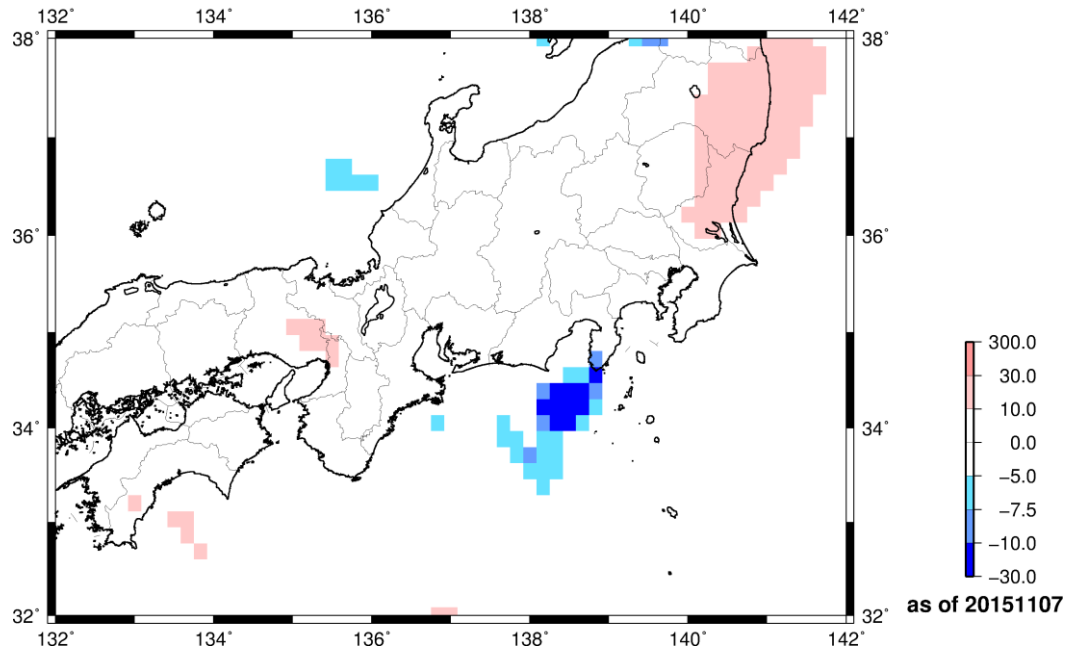


中部・近畿地方の地下天気図

8月に続き、定期的に報告しています中部・近畿地方の地下天気図です。まず8月末の段階でお示しした図を再掲します。



前ページの図でも陸域には異常(青い所)が無いことはわかります。11月7日時点の地下天気図を下に示しますが、駿河湾沖で面積は小さいですが、顕著な異常が継続している事がわかりました。面積が小さい事から、東海地震のような M8クラスの前兆ではなく、たとえば伊豆半島沖での M6.5 クラスの地震の前兆かもしれません。いずれにせよ注視していきたいと考えています。



また前回のニュースレターで鳥取県中部地域について、このような空間的な地図だけでなく、ある地点の時間変化が実は重要だという事を説明させて頂きましたが、今回は横浜と御前崎の2地点のグラフを紹介いたします。解析期間は 2001 年以降の 15 年間となっています。いずれも311の影響がようやく元に戻ってきたという状況です。上が横浜における時間変化、下が御前崎における時間変化です。御前崎のほうが311直後の活発化(グラフが上に行っている)が早いのは、3月15日に富士宮で発生した M6.5 の地震の影響が強く出ているためです。次回は御前崎沖の異常をもう少し解析してみます。

